

## 突然現れるかのように見える「のだ」文について

黄瓊慧\*

### 要 旨

「のだ」文には、先行文脈や状況がはっきりしたものもあれば、そうでないものもある。後者の「のだ」文は、突然現れるかのように見えるが、実ははっきりした先行文脈や状況を受ける「のだ」文の延長上にあり、その基本的機能も何かを特に伝えるため、直接に事柄を描写せずに深まる思考過程を経てから、背後にある定まった意味・事情を示すことである。

突然現れるかのように見える「のだ」文は、聞き手のいる対話にも独話にも使われる。

対話では、話し手は発話する前に「ね」「すみません」といった相手の注意を引くような言葉で「用件があること」を意味したり、相手の様子を窺って言語化されていない思考を頭の中で想定したりした上で、はじめてこの種の「のだ」文を用いて背後事情を示すのである。したがって、読者が不特定多数で眼前にいない社説などでは、読者のことを想定できないので、この種の「のだ」文は用いられない。

独話の場合でも、やはりある想定が話し手の念頭にあり、そして発話時の事柄と組み合わせることによってこの種の「のだ」文が用いられるのではないかと思われる。

キーワード：関係づけ、既定性、新情報、想定、背後事情

---

\*輔仁大学日本語文学科 講師

## 「突然」出現的「Noda」句

黃瓊慧\*

### 摘要

針對語境清楚的「Noda」句進行考察的先行研究偏多。但是，實際上語境不甚清楚，乍看之下好像是突然出現的「Noda」句也不少。這種「Noda」句看起來像是突然出現，其實它和語境清楚的「Noda」句的基本功能都一樣是：不直接表達對事物的認知，而是在一段深化的思考過程後，間接地提出背景情況的詮釋。

這種「Noda」句可以用於對話中，也可以用於自言自語時。在對話時要使用這種「Noda」句來提示背景情況，說話者於說話之初都會先以「喂」「對不起」等詞語引起對方的注意，來意味自己「有事要說」，或者會先觀察對方一番並且有所推察、設想後才使用的。因此，像是社論這類讀者身份無法特定，同時又不在眼前的文章，由於書寫者無法設想讀者對某件事的觀點，所以多半不會於文章的一開始使用這種「Noda」句。

另外，在自言自語的情形下，說話者也是在有所推察和設想，並且參照當時的情景之後才會使用此種「Noda」句的。

關鍵詞：關連性、既定性、新資訊、設想、背景情況

---

\*輔仁大學日本語文學系講師

## *Noda* sentence which seems to appear suddenly

Qiong-hui Huang\*

### Abstract

Japanese speakers frequently use *noda* sentences. The first type of *noda* sentence has a clear context or situation, but the second type does not, therefore, it seems to appear suddenly. In fact, the second type is an extension of the first type, and the basic function of both two types is not to make an utterance directly but to refer to something about “background matter” that suits the occasion.

The second type of *noda* sentence seems to be uttered suddenly and is not only used in dialogues but also when talking to oneself.

In dialogues, speakers usually use the words *ne* and *sumimasen* at first to get the listener’s attention and means that there is something he wants to talk to him/her about. After that the speaker uses a *noda* sentence refer to some matter in detail. Secondly, the speaker thinks about the situation and makes an assumption and then uses a *noda* sentence to refer to the “background matter”. Therefore, this kind of sentence is not used in the editorial genre since the readers are not in direct physical contact with the writer. Readers are unspecified numbers, so a writer cannot make assumptions about their statements. Furthermore, in the case of talking to oneself, such a *noda* sentence is used when the speaker makes an assumption about something that he/she thought might not happen and wants to refer back to background matter at the time of the utterance.

Keywords: context relevance, existing proposition, new information, assumption, background matter

---

\* Lecturer, Department of Japanese Literature and Language, Fu Jen University

## 突然現れるかのように見える「のだ」文について

黄瓊慧

## 1. はじめに

話し手の心的態度を表すモダリティ形式「のだ」については、多くの研究者によってこれまで考察されてきた。例えば、センテンスや場面に対して、「既定命題を提示する」(三上 1953、佐治 1972、国広 1985、田野村 1990 など)という見方がある。また、先行文脈や状況に何らかの「説明を施す」(金田一 1955、Alfonso 1966、寺村 1984、奥田 1990 など)という見解もある。その中で挙げられる用例の多くは、先行文脈や状況がはっきりしたものである。下の(1)(2)を例にすると、波線の部分が先行文脈や状況、下線の部分が説明などの意を表す。

- (1) やりきれない事件がまた起きた。 イラクで日本人男性が武装グループに拘束されたのだ。 被害者は福岡県出身の香田証生さんと確認された。(段落が変わって)犯人グループは 48 時間以内の自衛隊撤退を求め、応じなければ香田さんを殺害すると言っている。(朝日 10.28)
- (2) (遅刻してきた友人 B を A が横目で見る) B:「事故があったんです。」

しかし、実際の用例を観察すると、一見した限りでは突然現れるかのように見える「のだ」文、つまり、先行文脈や状況がはっきりしない「のだ」文も少なくないことに気づく。下の(3)はその一例である。

- (3) (コンビニの外) 柊二「いろいろ買って」と、さつきの大きな袋。/ さつき「ああ。うん、ついでに夕飯の買物、と思って」パンとかいろいろ。/ 柊二「……………」/ さつき「私、結婚したんだ」/ 柊二「うん」/ さつき「え、誰かに聞いてた?」/ 柊二「いや、それ。指輪」としている指輪。(ビューティー)

(3)の「私、結婚したんだ」という発話は、前の買い物の話と関係がないため、突然現れるかに見える。

このような「のだ」文について、野田(1997)では、「関係づけの『のだ』の文」と区別して、Qを状況や先行文脈Pと関係づける必要がないのに用いられる「非関係づけの『のだ』の文」とし、聞き手が認識していない既定の事態を「そのまま述べる文」と説明している。

本稿は、先ず、一見突然現れるかのように見える「のだ」文について、これを「非関係づけの『のだ』の文」と定義してよいかどうか、そして、この種の「のだ」文を「既定性」と「聞き手の認識していない情報(新情報)」という二つの特性・条件で記述しようとする見解に問題点がないかどうかという点を検討する。さらに、それを踏まえて、この種の「のだ」文の基本的な機能を明らかにすると共に、談話におけるこの種の「のだ」文の具体的な現れ方に考察を加える。

## 2. 問題点の検討

この節では、突然現れるかのように見える「のだ」文をめぐる「非関係づけ」「既定性」「新情報」についての問題点を順次に検討していく。

### 2.1 「非関係づけ」の問題点

「関係づけ」「非関係づけ」という観点からの分析について検討を行うにあたって、いわゆる「先行文脈や状況と関係づけている」ということは、先行文脈や状況と「のだ」文との間にどのような関係があるかという点について、先に問われなければならない。

端的に言ってしまえば、程度の差こそあれ、すべての文には先行文脈や状況との間に何らかの関係づけが存在するはずである<sup>1</sup>。例えば、広く解釈した場合、言葉とその指示する物事との「直示」という関係、時間の流れ及び空間の変化に沿って順次に展開していく出来

<sup>1</sup> Grice(1975)が提案したコミュニケーションの「協調の原理」で、原則として挙げられた四項目の中に「関連性(maxim of relevance)」がある。その原則の内容は関係のないことを言うてはいけないということであり、聞き手の立場から見れば、特に断らない限り、話し手の発話は、発話の文脈や状況に関係のある事柄として解釈するべきだ、ということだ。

事の中の「時空的な関係」などが挙げられよう。したがって、先行文脈や状況と関係づけがあるかどうかという視点からの分析は、「のだ」文の特徴を捉えたものとは言えないであろう。

さらに、「ようだ」「らしい」文の命題内容は徴候に依拠して導き出されたものと考えられ、また「からだ」文は先行文脈の原因・理由になるものと言われている。したがって、こういった文も、先行文脈や状況と何らかの関係づけがあると考えられよう。しかし、よく考えてみると、「ようだ」「らしい」「からだ」といった文の働きは、徴候性判断を表したり、原因・理由を示したりすることであるので、先行文脈や状況が存在するのは、それらの文の働きを支える特性・条件にすぎないためであることが分かる。

一方、1 で挙げた(3)の「私、結婚したんだ」のような文は、非関係づけの「のだ」文として記述してよいであろうか。下の(4)の「私、先週の土曜日結婚しました」にも先行文脈や状況が存在しないし、単に一方的に事実を発表したり報告したりする文である。結局、(3)は(4)と異なる表現であるが、先行文脈や状況と関係づけられていないという観点で扱うとした場合、両者の区別が付かなくなるのではないだろうか。

(4) (会社の食堂で、食事中の同僚に)「皆さん、実は私、先週の土曜日結婚しました。今度の週末に旦那を皆さんに紹介したいと思っていますんですが、都合の良い方は家に遊びに来てください。」

以上に述べた三点から、突然現れるかのように見える「のだ」文について、それを「非関係づけの『のだ』の文」と定義するのはいささか妥当性に欠けることが分かるであろう。

## 2.2 既定性の問題点

「のだ」文の命題が既定命題であることを、はじめて指摘したのは三上(1953)である。

「何々スル」を既成命題とし、それに話手の主観的責任の準詞部分「ノデアル」を添えて提出するというのが反省時の根本的意味

だろうと思う。(p. 239)

では、「のだ」文の命題が既定性を表すのはなぜなのか。この問題について、三上章は説明を与えていないが、佐治(1972)では、「誰が行くのか」と「誰が行くか」との違いを述べるとき、「もうきまったこと」という概念を使用し、その後佐治(1981)において、「のだ」文の命題がなぜ既定命題であるかについて統語的観点から次のように述べている。

述語の連体形によって表される判断は、話し手(の主観)が責任を持ち、主張するものとしての判断ではなく、一応、話し手(の主観)の責任から切り離されたところで、いわば客体的に成り立つ判断である。(p. 253～254)

ここで言われている「客体的に成り立つ判断」とは、とりもなおさず「既定命題」に当たるものと考えられる。

筆者の立場は、佐治(1972)に近いものであるが、「のだ」文の命題が「既定命題」であるのは、「のだ」文の命題が形式名詞「の」によって捉え直され、命題が定まった事態や固定的な事態を表すようになるからである。したがって、「のだ」文の命題は、突発的に生じて直ちに言語化された事態ではなく、また話し手の内面に生じたばかりのことを表現する事態でもなくて、過去や未来にかかわらず発話時以前にすでに定まっている事態を表すものであると考えられる<sup>2</sup>。

さて、ここで既定性の問題点の話に戻る。「のだ」文が「既定性」を有することは確かであろうが、それは「のだ」文の成立にとって特性・条件の一つにすぎないことに注意したい。以下に例を挙げながら検討を加えたい。

まず、命題の述語がスル形である「のだ」文(5)と非「のだ」文(6)を見てみよう。

(5) (登校する子供に)「気を付けて行くんだよ。」(彼奴)

<sup>2</sup>国広(1985)においては、「既成とは過去の事実とは限らず、未来についての計画でもある」(p. 9)と指摘している。

(6) 「気を付けて行きなさいよ。」

(5)は述語が意志動詞であり、登校の際の安全のために子供が実行すべきだと親が考えて行動を促す命令表現である。ここの「のだ」文の命題の述語はスル形(非過去形)の終止形ではなく、連体形である。したがって、行動の実行が望ましいのは、話し手が発話時に行った判断ではなく、話し手の心の中で前からすでに定まった概念・考えだと思われる。

これに対して、(6)は話し手がその場でただちに一回の行動の実行を要求する文なので、「既定性」を有していない。

以上の(5)と(6)を比較して見ると、「既定性」は「のだ」文に限られるように思われるが、下に挙げる対照の例から、必ずしもそうではないことが分かる。

以下に示す例は命題の述語がシテイル形である「のだ」文(7)と非「のだ」文(8)である。

(7) (何気なく外を見て)あっ、雨が降っているんだ。

(8) (何気なく外を見て)あっ、雨が降っている。

(7)は気づく前からすでに「雨が降っている」と話し手が捉えていたことを示すのに対して、(8)は眼前の状況をそのまま述べていると考えられる。しかし、(8)「あっ、雨が降っている」も発話時以前からすでに「雨が降っていた」ことが前提である点からすると、「既定性」を「のだ」文だけの特性・条件とすることには無理があろう。

最後に、命題の述語がシタ形である「のだ」文(3)と非「のだ」文(4)についてあらためて見てみよう。

(3)では、「～結婚したんだ」が表す結婚の事態は、聞き手に告白する前にすでに発生していることである。一方、(4)の「～結婚しました」ということは過去のことなので、同僚に発表する以前からすでに確定していることだと言える。つまり、命題の述語がシタ形の「のだ」文と非「のだ」文は、ともに「既定性」を有するものである。

上の(4)～(8)についての考察から分かるように、「のだ」文が「既定性」を有することは確かであるが、それは「のだ」文の成立にとって

一つの特性・条件にすぎないことが分かる。

### 2.3 「新情報」の問題点

一般に、聞き手の知らない新情報を伝えるのは、平述文に共通する特徴であると思われる<sup>3</sup>。こういう平述文を運用するときの特徴について、仁田(1991)は、次のように指摘している。

述べ立て文が、話し手から聞き手への実効的な情報伝達である限り、<述べ立ての内容>は、聞き手の知らない、あるいは十分理解していないものでなければならない。これを、述べ立ての内容をめぐっての話し手と聞き手の情報位置が[話し手>聞き手]である、と表現しておこう<sup>4</sup>。(p.79)

用例を挙げると、次のようになる。

(9) 安田は、腕時計をそっと見た。八重子がそれを目ざとく見つけて、「あら、ヤーさん、おいそがしいの？」と目を向けた。／「いや、いそがしくはないが、夕方から鎌倉に行く用事がある」(点)

(10) 「あ、部長さん、気が付きませんか――」と伸子があわてて立ち上がると、／「いやいや、僕はもう部長じゃありませんよ。それにあなたは社長だ。堂々と構えておいでなさい」(女社長)

(9)の「いや、いそがしくはないが、夕方から鎌倉に行く用事がある」ことは、聞き手の八重子が知らない事態であり、(10)の「僕はもう部長じゃありませんよ。それにあなたは社長だ」ということは、聞き手の伸子にとって既知ではあるが十分に実感され理解されていない事態に当たる。

以上に述べたように、「のだ」文以外の平述文も、その内容が聞き手にとって新情報であり、「新情報」という特性・条件は「のだ」文に

<sup>3</sup>聞き手を積極的に必要としない独り言では、新情報を話し手が自分で受け止めることになる。

<sup>4</sup>仁田(1991)は、「もっとも、常にこの特徴・原則が額面通り貫徹しているわけではない。たとえば、クイズ・クエスチョンに対する答えとしての述べ立て文などは、この特徴・原則から外れている」(p.79)とも述べている。

限られないことが分かる。つまり、「のだ」文が「新情報」という特性・条件を有することは確かであるが、「新情報」は「既定性」と同じように「のだ」文の成立にとって一つの特性・条件にすぎないものである。

では、「既定性」と「新情報」の二つの特性・条件が揃えば、突然現れるかに見える「のだ」文が成り立つのであろうか。次節の前半の記述から野田(1997)が挙げたこの二つの特性・条件だけでは不十分であることが窺えよう。

### 3. 突然現れるかのように見える「のだ」文の基本的な機能

それでは、1で挙げた突然現れるかのように見える「のだ」文(3)の基本的な機能は何なのか。

そこで、以上の観察を踏まえて検討を加えると、確かに(3)には、明確な先行文脈や状況が存在しないという点において、(1)(2)の「のだ」文と異なるものの、(1)(2)(3)の根底には共通する基本的な機能が潜んでいることに気づく。すなわち、それを一言で表すと「背後事情を示すこと」であり、具体的には次のようなものである<sup>5</sup>。

- (11) 先行文脈や状況を受けて、何かを特に伝えるため、直截に描写せずに、深まる思考過程を経てから、背後にある定まった意味・事情を示すこと。

ここで、一つ注意したいことがある。背後事情というのは、突如として生じるものではなく、まず何らかの認識があって、「これは何を意味するか」というと、～」「なぜ、こういうことになったか」というと、～」「～だが、そうでない。～」といった多様な形で、深まる思考過程を経てから背後にある答えを引き出すものである。したがって、

<sup>5</sup> 前に述べたように、「のだ」は事態をそのまま表現するモダリティ形式ではない。そして、「のだ」は、「にちがいない」「かもしれない」「ようだ」「らしい」「そうだ(伝聞)」などに後接できるため、それらの間接に判断を表す概言、伝聞の形式とも違うレベルにあることを物語っている(野田 1997、神尾 2002、黄 2002 が詳しい)。

また、先行文脈や状況と「のだ」文との意味関係を言えば、ある認識から深まっていくように「言い換え」「因果」「正反」といった多様な関係でありうるが、直示、並列、継起の関係に結ばれない。そこで、以上のことを考慮に入れ、他のモダリティ形式の機能と区別しながら、いろいろなところで多用される用語を避け、「のだ」の基本的機能を「背後事情を示すこと」と名付ける。

先行文脈や状況が不明確であるにしても、先行文脈や状況を受けること、何かを特に伝えるため深まる思考過程を経ること、既定性を有すること、新情報であることなどは、「のだ」の背後事情を示すことを支える特性・条件であると思われる。

以下、1で挙げた先行文脈や状況がはっきりした「のだ」文(1)(2)と、突然現れるかのように見える「のだ」文(3)を用例として、この二種類の「のだ」文の共通機能を見てみよう。

(1)(2)はそれぞれ先行文脈や状況がはっきりした例である。

(1)においては、「やりきれない事件がまた起きた」という先行文脈がある。「やりきれない事件」とはどういうことかと言うと、「イラクで日本人男性が武装グループに拘束されたのだ」と、書き手は先行文脈で読み手と共有認識を持った後に、「のだ」文によって示される定まった背後の意味を述べて読み手に更なる情報を提示しようとしている。

(2)の話し手Bと聞き手Aが共有する遅刻した場面においては、Bは「すみません、遅刻しました」と素直に謝ることをせず、なぜ遅刻したかの背後にある定まった理由「事故があったんだ」を述べて言い訳をしている。

一方、突然現れるかのように見える「のだ」文の例は(3)である。(3)の対話はコンビニの外で行われ、かつて恋人同士だった二人が偶然に出会って買い物のお話をし、しばらくの沈黙が続いた後に、買い物のお話と関係がない「私は結婚したんだ」という発話が行われる。したがって、この種の「のだ」文は野田の言う「非関係づけの『のだ』の文」に分類されることになる。

しかし、むしろ、この場合では、さつきが恋人だった柊二の様子を観察し、「柊二は自分に対する印象は以前のままだろう、自分が結婚していないと思っているだろう、自分が結婚したことを知らないだろう」と想定することによって、あたかも柊二と共有するかのごとき認識が、言語化されないまま、前提状況としてその瞬間頭に浮んだと解釈したほうが適切ではないかと思われる。だからこそ、さつ

きはそう想定した上で、想定の内容と食い違う背後事情「私、結婚したんだ」という事実を聞き手の柊二に告白したと考えられる。つまり、ここでは、話し手が一方的に報告するのではなく、先ず聞き手の様子を推察し、そこから相手の思考を想定した上でそれと食い違う既定の事情を明示したわけである<sup>6</sup>。

この種の「のだ」文は、関係のない先行文脈があり、かつ状況が(2)ほど外在世界にはっきり存在せずに話し手の頭の中で想定されているので、状況の把握を難しくさせているものと思われる。

#### 4. 談話における具体的な現れ方

この節では、突然現れるかのように見える「のだ」文を分類し、談話に出現するときの具体的な現れ方を少し詳しく述べていきたいと思う。

結論から言えば、この種の「のだ」文は、現れ方の多様性という点において、先行文脈や状況がはっきりした「のだ」文と比べて見劣りがするわけではない。

この種の「のだ」文は、先行文脈や状況がはっきりした「のだ」文と同じく、聞き手を積極的に必要としない独り言にも、また、聞き手を必要とする対話にも用いられる。そして、「のだ」文の命題は全くの新情報もあれば、十分承知されていないものもある。一人称、二人称、三人称のいずれも「のだ」文の主語になりうる<sup>7</sup>。さらに、運用の面では、情報のやりとりだけでなく、行動の実行にも関わっている。

ここでは、上に述べた観点に基づき、この種の「のだ」文を、聞き

<sup>6</sup>本稿が影響を受けた先行研究の一つに田野村(1990)がある。氏は、「のだ」文の使用において、特定しがたい事情が念頭に問題とされる場合があると指摘している。しかし、氏が挙げた5つの用例は、「のだ」文の一文だけで前後の文脈や状況が不明なので、理解しにくいところがある。

<sup>7</sup>一、二、三人称以外に非情名詞も「のだ」文の主語になりうる。便宜上、一人称の所有物は一人称とし、一人称・二人称以外の非情物、機構などは三人称とする。前者の例は(16)「それは去年フィリピンに行ったとき買ってきたんです。」の「それは」、後者の例は(18)の「新聞もテレビも～んだぜ」の「新聞もテレビも」である。

手を必要とするかどうか、全くの新情報であるかどうか、主語の人称または情報のやりとりかどうか、行動の実現を伴うかどうか、という基準で分類する。その結果、おおむね「発見」「思い出し」「告白」「教示」「再認識させること」「決意」「命令」の七つの現れ方に分けることができる。図で示すと、次のようになる。

現れ方		例文	
話者自身が情報を把握する(独り言)	発見(すべての人称)	12、13	
	思い出し(すべての人称)	14	
聞き手に情報を伝える(対話)	情報のやりとり	告白(一人称)	15、16
		教示(三人称)	17
		再認識させる(すべての人称)	18
	行動の実行	決意(一人称)	19
		命令(二人称)	20

以下、各現れ方に説明を付け加えながら述べていく。

最初に挙げる(12)～(14)は、独り言に用いられる現れ方の例である。

(12) 桐島、階段の窓から外を眺めている。／「ここにいたんだ——」遠藤が近づく。(BLUE)

(13) 杏子、スウーッと他のカードを上にはずらす。名前。沖島 柊二。(ふりがな)オキシマシュウジ。杏子、見ている。後ろからサチ、覗き込んで。／サチ「ふう～ん、あの人、オキシマシュウジって言うんだ」(ビューティー)

(12)の「ここにいたんだ」は、相手を見つけて自分が自分に言い聞かせる「発見」の現れ方である。この文は、「自分が桐島を探したが、なかなか見つからなかった。どこにいるかな」「桐島はここにいるかな」と思っていた」といった思考は言語化されていないが、話し手の念頭にあるのではないかと思われる。そういった思考が前提状況にな

り、発話以前にすでにここにいる相手を見つけたため、単に相手が「ここにいた」という事実だけを表す発見の現れ方とは、ニュアンスが違う。

(13)の現れ方も「発見」である。文頭の了解の意を表す「ふう～ん」という感嘆詞から、話し手は前から「あの人」(名前がカードの上に乗っている人)に注意を払っていることが分かる。注意を払ってあの人はどういう人かを思うことは、この「のだ」文の前提状況と思われる。そして、あの人はどんな人かという、覗くことによって名前が「オキシマシュウジって言う」ことを発見して自分が自分に言い聞かせたわけである。

(14) お父さん「お弁当を食べなきゃ」/サツキ「そうだ！みっちゃん家に行く約束なんだ」/メイ「メイも行く」(となり)

(14)は「思い出し」の用例である。サツキはお父さんと話をしている途中で、約束したが忘れていた「みっちゃん家に行く約束」を思い出した。その場の状況は、言語化されていないものの、何か気に掛かる意識がここに潜んでいると考えていいであろう。つまり、何か気に掛かる意識が、忘れていたことやきちんと覚えていなかったことを思い出させる前提状況やきっかけになっているわけである。

次に挙げる(15)～(20)は、対話に用いられる現れ方の例である。

(15) 昌也：「二人で住むなら六畳一間だって充分さ」/伸子：「二人？——いつかは三人か四人になるのよ」/昌也：「そのときはそのときさ」とは笑って、「ね、僕、大学やめて働こうかと思うんだ」/伸子の顔がこわばった。「それはだめ！」(女社長)

(16) (友人Aの家で物置の棚にあるキーホルダーを、Bはじっと見入っている。A：「それは去年フィリピンに行ったとき買ってきたんです。かわいいでしょう。」

(15)(16)とも聞き手に一人称の自分や一人称の所有物について「告白」する用例である。(15)においては、話し手は話の途中で「ね」

で呼びかけて聞き手の注意を引く。この場合、聞き手は「何かがあるようだ」と理解するであろう。そこで、それに続けて、話し手は「用があって呼びかけた」後、「僕、大学やめて働こうかと思うんだ」と言って今まで考えていた背後事情を告白する。

(16)には、聞き手の注意を引くような呼びかけがないので、(15)と比べて「のだ」文の出現がさらに突然性を帯びているかに見える。しかし、実際には、話し手AはBがじっとキーホルダーを見ている視線から「キーホルダーに興味があるだろう」ことを前提状況として想定し、その上で、聞き手Bにキーホルダーをいつ、どのように入手したかといった背後事情を提示している。

なお、(15)(16)においては、「のだ」文が話段のはじめに切り出されるため、話し手の会話を開始し、さらに続けようという意図も窺えるであろう。

(17) 神部が犬小屋から戻ると、妻はひどい痙攣を起こし悶え苦しんでいる。／神部「……おい、だいじょうぶか、しっかりして！おい！」急ぎ一一九番に通報(十一時九分)する神部。／神部「……もしもし、妻が苦しんでいるんです。……大至急救急車をお願いします。……はい、……北深志一丁目十三……神部です……大至急お願いします」(日本)

「教示」の現れ方は、相手に三人称のことを教える現れ方である。(17)の場面は一一九番通報なので、話し手にとっても聞き手にとっても、電話を掛けているからには用があるはずだという共通認識があると思われる。その共通認識がこの場における前提状況である。用とは何かというと、神部が聞き手に伝えた「妻が苦しんでいるんです」という事実である。

(18) 社の幹部たちを前にして、険悪な空気が漂っている。営業部長「(横柄な調子で)新聞もテレビもよそは派手に黒の線で流しているんだぜ。世論もそうなってる。硬いニュースばかり作っていないで、少しは見習ったらどうだ

い」笠野、カチンとくるが無視して、／笠野「いいですか皆さん、もし結果白だったら、わが社の信用は一気に上がります。先々のことを考えたら、この際」(日本)

「再認識させる」現れ方は、聞き手に伝えたが納得してもらえなかったり、聞き手が知っているが十分自覚・理解していなかったりすることを、もう一度認識させる現れ方である。(18)の前提は、新聞社の幹部たちが他社のやり方を知ってはいるが、他社の意見に流されるのではなく、自分達自身がいかに報道するかを判断しなければならないと考えている状況である。そして、営業部長はそういう彼らの思いを知り、当面の情勢を十分理解していないのではないかと想定し、「新聞もテレビもよそは派手に黒の線で流しているんだぜ」と説教して再認識させようとしている。

(19) 「手錠かけられて逃げ回ってたときには、そんな威勢のいいこと言われてられなかったんじゃない？」／「もういい」尾島はぶっきら棒に遮った。「今日は大畑さんを迎えに寄って、それから会社へ行くんだ。ハイヤーはまだか？」(女社長)

(19)は主語が一人称であるが、述語の「行く」が意志動詞の非過去形なので、告白の現れ方ではなく、「決意」の現れ方に属するものと見ることができる。この例も、話し手が話の途中で、前の話と関係がなく、話題を換える文である。「のだ」文を発話するに当たって、聞き手の妻は尾島がこれから会社に行くことを知っている。しかし、妻は自分がまっすぐに会社に行くわけではなく、会社を再建してくれる富菱銀行の実力者大畑を迎えに寄ることは知らないであろうと尾島は想定し、想定の内容と食い違う背後事情「今日は大畑さんを迎えに寄って、それから会社へ行くんだ」を言って、発話時以前にすでに決意している内容を明示している。

(20) 神部「みんな呼んで！」長女はインターホンで、離れにいる長男と次女を呼ぶ。／長女「あ、もしもし、お母さんが、早くきて！」／神部「母さんのパジャマ……楽にさせるん

だ！」(日本)

(20)は聞き手に行動の実行を促すときに用いられる「命令」の現れ方であり、主語が二人称、述語が意志動詞の非過去形である。この例の場面の状況は、話し手の妻が苦しんでおり、話し手はその光景を見て、一瞬「いかにすべきか」といった疑問が頭に浮かび、そして社会常識に基づいて「人は体の具合で苦しんでいるとき、衣服を緩めて楽にさせるべきだ」という考えに行き着いた結果、その場にいる子供に向かって「母さんのパジャマ……楽にさせるんだ」を言ったわけである。したがって、この現れ方を命令と見ることができる<sup>8</sup>。

以上の考察から分かるように、突然現れるかのように見える「のだ」文は、よく話の始めに現れたり、話の途中で先行文脈の内容と関係ないままに姿を見せることがあるが、実は話し手は、「のだ」文を発話する前に、「ね」「もしもし」「あの」といった相手の注意を引くような言葉で「用件があること」を意味したり、言語化されていないが、相手の様子を窺って頭の中で巡らせる思考が前提状況になったりしているのである。(15)(17)は前者の用例であり、それ以外は後者の用例に属する。

話し手の念頭におかれた想定が前提状況になるという後者の用例について具体的に説明すれば、例えば、(12)では「自分は桐島がここにいるかなと思っていた」、(13)では「自分はその人はどんな人かに興味がある」、(14)では「何か気に掛かることがある」、(16)では「相手はキーホルダーに興味があるだろう」、(18)(19)では「ある事態について相手は～と思っていたらだろう」、(20)では社会的常識などである。要するに、これらの「のだ」文は、先行文脈を受けていないが、上に述べたような想定が念頭にあるからこそ、はじめて「のだ」文が出現できると言えよう。この見解は、社説のような文章におい

<sup>8</sup>命令の「のだ」文において行動の実行が望ましいという判断は、同語反復のとき(銀行強盗が入って職員に向かって「お金を出せ。出すんだ。」)でもいいし、(20)のように話し手だけではなく、多くの人に固定した観念として広く存在すると考えられるときでもいい。つまり、何らかの形ですでに定まっていれば用いられる。

て、始めや先行文脈と何の関係もない部分には「のだ」文が現われないという事実からも裏付けられる。社説においてこの種の「のだ」文が現われないのは、書き手は目の前にいない不特定多数の読者の様子を把握することが困難であるので、「のだ」文を用いて背後事情を示す余地がなくなるからである。

また、以上の考察から分かることがもう一つある。それは、この種の「のだ」文は、聞き手がいる対話の場合で、用件を切り出したり、新しく話題を提示したりして会話を開始したり続けたりするのに用いられるということである。

## 5. おわりに

以上、突然現れるかのように見える「のだ」文について、(一)「非関係づけ」「既定性」「新情報」に関わる問題点、(二)基本的な機能、(三)具体的な現れ方の諸点について、検討し考察を加えた。

その結果、以下の4点が明らかになった。①突然現れるかのように見える「のだ」文を非関係づけの「のだ」文として分類した場合、記述において現象文や事実報道文などとの区別が付けにくくなる。②先行文脈や状況と関係づけることは、「のだ」文の基本的な機能ではなく、既定性や新情報と同じように「のだ」文の「背後事情を示すこと」という機能から生まれてくる特性・条件の一つにすぎない。③この種の「のだ」文は、突然現れるかに見えるが、実は相手の注意を引くような言葉で「用件があること」を事前に示したり、言語化されないままで話し手の頭の中で想定された事態を前提としたりした際に、はじめて使用される。そして、この種の「のだ」文は前提が言語化されないことで、先行文脈や状況がはっきりした「のだ」文と違いはあるが、両者とも直接に事柄を表現せずに深まる思考過程を経てから背後事情を示すことに共通点がある。④この種の「のだ」文の具体的な現れ方を言えば、独り言に用いられる「発見」「思い出し」と、対話に用いられる「告白」「教示」「再認識させること」「決意」「命令」の七つに分けられる。

また、聞き手が目の前にいる対話の場合において、「のだ」文は用件を切り出したり、話題を提供することによって会話を開始したり続けたりするのに用いられる。それに対して、読者が不特定多数で眼前にいない社説などにおいては、読者の様子を窺って関連のある思考を巡らせることができないために、この種の「のだ」文は用いられないのであると考えられる。

なお、筆者の観察によれば、聞き手が上司や疎遠な関係の場合においてこの種の「のだ」文の使用が好まれないという傾向が存在するようである。これは、この種の「のだ」文を使用することで、遠慮すべき相手の私的領域にまで踏み込んで推察することによる押し付けがましい印象を、話者が避けようとしているためであると推測できる。

今後は、「のだ」文の使用と人間関係の親疎、上下などとの関わりを課題とすることによって、「のだ」文の本質に迫りつつ、その使用の際の特徴について考察を深めたいと思う。

## 参考文献

- 青木惣一(1993)「「のだ」文の基本的意味をめぐる諸説の検討と今後の課題 「のだ」文に対する語用論的分析試案 その1」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』16
- 奥田靖雄(1990)「説明(その1)——のだ、のである、のです——」『ことばの科学4』言語学研究会編 むぎ書房
- 角田三枝(2004)『日本語の節・文の接続ともダリティ』くろしお出版
- 神尾昭雄(2002)『続・情報のなわ張り理論』大修館
- 黄瓊慧(2002)「文構造における「のだ」の位置づけ」『台湾日本語文学報』17 台湾日本語文学会
- 黄瓊慧(2006)「異なる文章類型に見られる「のだ」文の意味・用法の異同」『日本語日本文学』31 輔仁大学
- 金田一春彦(1955)「日本語」『世界言語概説 下巻』研究社

- 国広哲弥(1985)「「のだ」の意義素覚書」『東京大学言語学論集'84』東京大学
- 菊地康人(2000)「「のだ(んです)」の本質」『東京大学留学生センター紀要』第10号 東京大学留学生センター
- 佐治圭三(1972)「「ことだ」と「のだ」——形式名詞と準体助詞——(その二)」『日本語・日本文化』3 大阪外国語大学(1991『日本語の文法の研究』ひつじ書房に所収)
- 佐治圭三(1981)「“のだ”の本質」『日語学習与研究』3 北京对外貿易学院(1991『日本語の文法の研究』ひつじ書房に所収)
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ 「のだ」の意味と現れ方』和泉選書
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 名嶋義直(2002)「「説明のノダ」再考——因果関係を中心に——」『日本語文法』2巻1号 くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 三上章(1953)『現代語法叙説——シンタクスの試み——』刀江書院(1972 くろしお出版復刊版)
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(2000)『日本語の文法3 モダリティ』仁田義雄・益岡隆志編集 岩波書店
- 山梨正明(1992)『推論と照応』くろしお出版
- 吉田茂晃(1988)「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15 神戸大学
- Alfonso,Anthony(1966) Japanese Language Patterns Vol.1, Sophia University L.L. Center of Applied Linguistics.
- Grice,H.P.(1975) Logic and conversation. In Cole, P. & Morgan, J. L. (eds.), Syntax and Semantics, 3: Speech Acts. Academic Press.

**出典**(本文中で注記のないものは作例である。本文中には()内の略称で示す。)

朝日新聞「社説」2004.10(朝日)

映画『彼奴を逃がすな』(1956)鈴木英夫(監督)(彼奴)

熊井啓「日本の黒い夏」『'01年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会(編)映人社(日本)

北川悦吏子(2000)『ビューティーフルライフ シナリオ』角川書店(ビューティーフル)

本調有香「blue」『'03年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会(編)シナリオ作家協会(blue)

宮崎駿(1988)『となりのトトロ』小学館(となり)

\*赤川次郎『女社長に乾杯!』(女社長)

\*松本清張『点と線』(点)

(\*はCD-ROM版 新潮文庫1995の100冊による)